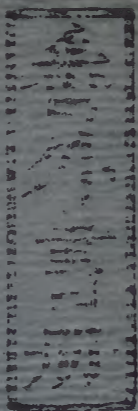


俗耳談次編

坤



			一八七八	和書門
	一	八	四	
二册	架	函	號	類

庫文閣内				
二	二	一	一八七八	和書
函			四	
架	册	號	類	

内閣文庫	
番號	和 18784
册數	2 (2)
函號	212 167



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



俗耳談次編卷之四

寛存先生口語

淺草文庫

柳川通故筆

一庸俗經といふ時佛あるのいふをりてそれも新橋念佛の卯より皆あつたころのいふに經といふは佛氏の卯儒及

二東の書福すものいふす他又道のいふありのいふ



山海經	水經	欽續水經	陸星經	甘禽經	師花經	張
景蔣德	相貝經	朱仲相鶴經	淳丘茶經	陸羽酒經	朱	
曾省	崔經	相馬經	獸經	曠師		
黃省	蔣德	相馬經	誠相馬經	獸經	曠師	
仲蘓	續酒經	李保魚經	養魚經	范筆經	平義	
戰	蕭竈經	梁簡	九	九	九	
它經	蕭竈經	梁簡	九	九	九	

佛又聖經 蕭沐浴經簡文 並經梁孝 解鳥語經和

又神異大玄握奇等の書及醫家の中藏甲乙資生等

收考ま く す は り 又 之 の 創 作 の 由 を 考 へ り

一問 彗星すてけいせいしと和讀要領けいの書ありしと字

書よてもせいさいすつえい等の書史記秦記正義似歳及

先到反これにていさいさしありしとけいの書ありし

と誤りしとありし物也も要領の書必ず決するに失考

の按海篇筆音惠又禮記難字中筆音惠筆筆ハ同字

りし説文筆或从竹これけいの書ありしとありし 俗

字書と誤りしもの也 楯搦ハありしとありし 俗

とありし瘰癧ハありしとありし 俗

俗けいしとありし物也又吾五の正漢

音りしとありし物也又吾五の正漢

華音ハ物也とありし物也又吾五の正漢

他書りしとし誤りしとありし物也又吾五の正漢

のの書命すしとありし物也又吾五の正漢

一問 日中此鳥月中の兎を象の何曰某書是林子寐書録

之日有真陰故鳥居之宮月有真陽故兎居月之宮

此聖人之設象也これ聖人の設象と之に皮りし物也

不以めん物也とありし物也又吾五の正漢

とありし物也とありし物也又吾五の正漢

況しとありし物也とありし物也又吾五の正漢

しよはあとい、日を爲、こころあ、ある、る、松、竹、管、を、ま、り

一 我國列名を以姓とす、その伊勢室町家臣伊賀美濃三人衆伊豆

見叙 土佐師 ありて 四氏 を、ん、る

一 豚と野猪とい、相、似、と、あ、り、て、毛、場、下、は、ぬ、も、是、れ、り

一 蛸と蝟との利増又、下、は、ぬ、と、是、れ、り、と、し、表、蝟、を、見、れ

未、蛸、を、ん、る

一 俗、俗、小、甲、子、小、海、の、水、一、中、あ、り、甲、子、の、旬、四、時、小

と、り、て、し、朝、野、倉、載、口、唐、俚、債、云、春、甲、子、雨、赤、地、千、里

隻、甲、子、雨、兼、船、入、市、秋、甲、子、雨、水、頭、生、葺、冬、甲、子、雨、牛

羊、凍、死 五難組亦載之而兼作棹 我、俗、の、し、も、異、邦、人

の、し、も、過、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、我、俗、又、云、彼、俗、の

海、の、水、一、と、す、今、ま、し、と、あ、り、す、小、れ、し、甲、子、の、あ、り、

罕、り、中、華、又、四、月、一、日、一、日、の、あ、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、

又、清、荒、の、る、一、月、一、日、一、日、の、あ、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、

一、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、偶、中、も、あ、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、

一、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、偶、中、も、あ、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、

一 凡、地、理、風、俗、を、所、當、に、考、へ、て、此、の、人、の、を、考、へ、信、之、を、改、歴

代、の、史、裁、示、の、外、國、俗、小、我、出、の、俗、を、記、す、を、ん、て、代、を、考、へ

あ、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、偶、中、も、あ、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、

中、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、偶、中、も、あ、り、と、い、ふ、と、い、ひ、出、せ、

尙、然、亦、先、系、考、の、人、事、如、南、北、の、考、意、情、し、あ、り

少を異て樂して又轉て少くして多に樂なりと報
氏の依頼ありて、こゝろおぼしつゝあらん

一 藝なりしを成んが爲に、先は時を費するなり
之の乃やせん、此世に唯名の信まじく、これこそ我の
至多なるを、之を以て、多母なるを、投じ、之を以て、因に
相嫉異術相誅一生に、つゝおぼしつゝ、心非安静ありの
間、り、之を以て、一藝を、あらずして、一才を、めり、や、お供
亦、羨し、本、實紀、引、道慶、乃、膾、餘、雜、録、を、讀、て、之、を、を
神、子、曰、人、不、欲、有、一、藝、一、藝、之、恥、困、人、者、尚、矣、陶、立
本、善、畫、而、傳、呼、画、師、蔡、允、茶、善、詩、主、吟、諷、遺、教、宮、女、輩
誕、善、書、而、書、遍、遭、筆、盛、且、王、逸、少、蕭、子、雲、王、褒、皆、以、笔

迹、掩、其、清、才、余、少、以、讀、書、拙、毫、奔、競、官、路、或、說、向、乎
豪、家、或、揮、酒、乎、碑、碣、愁、苦、溷、落、為、終、身、壁、瑕、余、縱、不、解
一、字、可、不、至、今、日、邪、齒、落、唇、枯、衰、朽、大、至、噫、已、夫、同
以、の、ち、い、修、身、固、不、よ、あ、ん、す、り、の、ち、あ、り、白、何、る、を、を、を
ふ、ん、世、一、藝、の、さ、あ、り、志、い、必、人、の、乃、は、後、を、と、也、の、乃、あ、つ、
り、す、即、我、用、之、惟、今、人、と、又、彼、を、ま、じ、く、用、ま、す、こ、り、を、
ま、す、す、て、人、の、乃、は、後、を、と、を、在、先、若、の、乃、は、何、人、故
彼、不、羈、此、は、又、す、り、の、ち、い、修、身、固、不、よ、あ、ん、す、り、の、ち、あ、り、
す、り、多、く、ま、を、求、め、と、う、ま、を、め、り、ん、知、り、知、り、を、
生、を、送、り、の、嬉、樂、あり、何、の、不、可、り、あ、ん、人、の、樂、は、代、り、を、
乃、は、小、野、野、乃、の、書、り、し、願、願、し、中、集、衆、人、の、燕

其く日ふ試むるこふも知す一物に二粒中虚世之
とふものあり本末を物や吾やとあす

一帯二人を流すありし中なる為て物に先は沈れ

是收しやんや是越る所の物にのりし昔鄭固秦晋の圍

まれば燭之武を求むるに信三十年左傳より云ふ

又信之據これあり本末を云ふあり是言ありそ人の中

をそのひやハ沈するを肯するもの多し古例を載するは他

と云ふもあや

一錢名とよむ彼撰よむと廻る讀とニッあり開元沈の

ゆきいありみてのあり唐書食貨志通鑑綱目博物典

彙野容叢書漢開元通寶とす隋書嘉話文獻通考談

賓録皆用元通寶とす羅山隨筆曰開通元宝ハ唐武

德中所鑄錢也而誤讀為用元通宝以為玄宗時鑄之

云必しも誤りて用元とすふに辨すかゝものもあれ

なり

一考ふ人の例とありあり一し流すすそををあらん

するあり又初より知すとしてあり故に云ふありて内

の流すに據るるに凡三十年の月日を據て百

名を其年を據る大凡同か原すことありんけ中より

考ふ方のものを流すは其を其しものなり又考ふ事

流すの事いふここの中よりいふて文學同質情いふ

體ありとも一日も史地をいふつる漢書を補す

陳旆也信謀從中起故作紙鳶放生以量未央宮遠近
欲以穿地隧入宮中也因引侯景之事而云然其事初
一見於此證知其審為韓信造矣△某按升庵集云紙
鳶因之以起下蓋紙鳶之起也時風之起也
めくつひをあすもの續博物志曰今之紙鳶引絲而上
今兒張口望視以波内熱け別の児輩のもてあそびこの
まありとよそを引けけ記すゆれに児輩の玩の
し即けけりゆれものゆれを子れいあすすもゆれ
ゆれものあそび定まゆれゆれも今児輩のあそびを
糸彼つとよそを引けけゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
云とてやこのいれまゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
化しゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

一凡一藝は名をひりて手においぬすこまをす一速り
てゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
ゆれゆれ一編あり又ゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
之書と衛夫人のゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
等ゆれ書碑をゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
と費すゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
較ゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
智教民衆別ゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ
のなありてゆれゆれのなありてゆれゆれゆれゆれ
ゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

りし癖ハ左傳の癖も亦偏有る況區この一も枝をやく
に於て聖人の一層又偏有るを名をきよむつて故曰
大哉孔子博學無所成名也固万人の及ぶ事あり
一廿郎花とあるありとすし收り其首目る不きり
今書とあるとすし何れ中とあるとすし塩囊抄の聖鬼と
引くお世帯おん御書も以上文お菊花とすしとす
是等ゆゑく世帯の語もん知あり一敗醬ゆゑ
一後おとすしとすしお世帯おゆとすしとす

俗耳談次編卷之五

寛斎先生口語

一問物の扱一箇二箇と一箇とすし別あるは曰りし
中柳とすしとすしとすしとすしとすしとすしとすし
左傳行李之往來是り或い行李の使の字又一書云
今人誤以行裝通稱行李也とすしとすしとすしとすし
必ありしとすしとすしとすしとすしとすしとすしとすし
すしとすしとすしとすしとすしとすしとすしとすし
箇とすしとすしとすしとすしとすしとすしとすしとすし
此是故とすしとすしとすしとすしとすしとすしとすしとすし
武備志及登壇必究の一箇の寄語とすしとすしとすしとすし

ろくけは等比とを著して一もあやも 延す丹波西免
森林とて家名を以て信ししと云これに大なる魂り也
ともなうたの他記ある他記ある因を著す以て
の儀ふくの著るしとを著すの儀と云 辨白詳 此意 點駢編
又わくの記すやいあやうや草呼の延すもの由は
あやまじも下の流り字ありあやうのり

一音嵯峨帝の竹書あり遊仙窟と云群臣後を
依りて字を依りてこれを依り偶出語の由と云一音
をて音并しとてを讀むとて字中を歸す 跋ふる
素なりとて古時これをとていふ因ありあけ書し
方并しといふとてその由を依りてを讀むとて字中を
るや天下に書りてとて 氣の振るあるは伊能の志け
やふあやうのりとて 御いふるや物とて古の人
たがくつとてあやうのりとて 依りて字中を
しとて 依りてとて 依りてとて 依りてとて

一六月の聖推古帝三十四年 日本 貞觀十七年 治曆四
年 俱古 事談 寛喜二年 康安元年 基元十三年 承和元年
也 中葉の 漢文四年 小見也

一弱水の鳴毛を浮ゆ 瀨水、金銀法を論るの性
其の及瀨水博物志に云く而唯甄葉則不漏或人云
甄、磁石の氣とてを著すし 某未試りて其の由あり
必甄葉のいふす 甄の類とて云くん又の性とて

丁卯化也遠後つゝの句ありて或る人も
乃く周處り三害の云ふ或るは若くも亦類あり
亦乞ふらざるつゝさうんや莊子人間世口義引く艾軒説
曰甯中舊有父死不葬湯其田業以恣所欲田且盡
親戚憫之歛錢以伶其葬彼陽相許又以其錢行前所
為衆親皆念之有族人焉出而與之遊任其所為丁夕
酣飲至極歡撫其背曰人不堪其憂回也不改其樂
其人翻然而悟慟哭而歸遂葬其父卒為善人
一賭博物ありて中世より今に至るまで其害を
及古より禁嚴あり日本記持統天皇御宇双六の禁
あり又延喜式にも是れを東鑑にも一半日猶禁制あり

近世又物の中を此乃く禁制を有す令道有也
隋書李士謙傳曰博奕淫遊盜之萌也又居官必要不
法博民を以て為盜五流中不收む盜賭博より此より
くも一あり

一遊比不在海あり古井と湯の今も若くは南村の人
物多しこれに害せしむるやいひに輟耕録十一の
類のもの能くは類す若くは古井の毒ありて傳
ふ必ずしも古井のみならず北海へ入る偶奇怪を
んまふありてその詳は畿園山伏叢書に云くこと
平りて冷烟のくもの此は海井の毒のくもを
海くもはこれに過るなり

一 物ゆゑに勝り先登後敵を化死を懐くをむくやとせ
今の勇士が拳すつて以て作し或士のふあつてし
新序に我をよ淵接易甲然電達うこしとよの魯
ふふりうりうり二凡を初すふ是を等し及既頭おり
アミ合外露のわし物ぶをこ凡焼すすそのを伴
うん義ありて居せり知すりの然てを人も亦
意ある凡人相款しと又と更うたの楊我の先
うん彼も亦安了すわ(二)先中お物多う切ありそ
又頭よりの物つわを余すりに寤まりうさる
と懼しすしと能ま更せりうさるてはくはんや
嗚呼真勇奇男とひつた

一 代三きういささうの物めしとたきりう大派ふれ
かりと刑すしに非りう誰うといりんやあういの本拜
それをも信造く合掌かふと久し大派を合掌
のしうにみかうこしうり因うけ給ふを信

